

西周時代における天の思想と天子概念——殷周革命論ノート(三) 下——

高 島 敏 夫

緒論——問題の提示

- (一) 殷周革命のイデオロギー的側面——天の思想が浸透する過程

- (二) 王と天子の捉え方について

- 一 祭祀言語としての金文——祖祭の場で祖先の榮光を朗唱する

- (一) 金文の基本構造

- (二) 西周時代の諸「王」關係の金文——王とは？

以上(上)

- (三) 西周前期の「天子」關係の金文——天子とは？

- (四) 白川靜の提示する「天子」について

- 二 天の思想が浸透する現象

- (一) 「對揚王休」類から「對揚天子休」類へ

- (二) 「對揚天子休」類の莊嚴化の過程

- Ⅰ 「對揚天子休」類の「對揚天子休」型

- Ⅱ 「對揚天子休」類の「對揚天子魯休」型

- Ⅲ 「對揚天子休」類の「對揚天子丕顯休」型

Ⅳ 「對揚天子休」類の「對揚天子丕顯魯休」型

(三) 小結

- (三) 西周前期の「天子」關係の金文——天子とは？

前節では西周時代における「王」は周王を指すという、一見自明のように思われることが必ずしもそうではなかった例を見てきた。そこから垣間見えるのは西周王朝を構成する周王と諸氏族との關係が必ずしも一元的なものではなかったということ。いってみれば絶対主義的な専制政治が敷かれた時代ではなく、王朝とそれを支える豪族たちの關係が緩やかな結びつきであった時代の姿、それこそが古代的な王朝の實際の姿である。ただ彼らを結びつけていたのは、崇拜する超越神を共通のものにするという一點にあったということだが、この点についてもまだ十分に定着していなかったのが西周前期である。ここでは西周前期の銘文で「天子」が周王を意味しない例を見ていくことにしたい。ただ、「天子」という言葉そのものがまだあまり使われない時

代でもあって、現存する前期の青銅器で「天子」という語を用いているものは、『白姜鼎』・『爰殷』・『爰乍周公殷』・『獻殷』・『麥方尊』の五例を数えるに過ぎない。このうち「天子」が周王を指さないのは『爰乍周公殷』・『獻殷』・『麥方尊』であるが、比較対照させるためにこれら五例を一通り見ておくことにする。作器者は何れも殷系氏族である点が極めて興味深いが、これについては後で改めて述べる。

【A】 佳正月既生霸庚申、王才葦京涇宮、天子冫室白姜、易貝百朋、

白姜對揚天子休、用乍寶障彝、用夙夜明高于邵白日庚、天子萬年、

𠄎孫孫子子、受厥屯魯、白姜日受天子魯休 《白姜鼎》集成2791

【訓讀】

これ正月既生霸庚申。王、葦京の涇宮に在り。天子、白姜を冫室して、貝百朋を賜ふ。

白姜、天子の休に對揚して、用て寶障彝を作る。用て夙夜して邵伯日庚に明享せよ。天子萬年ならんことを。世孫孫子子、厥の純魯を受けん。白姜日に天子の魯休を受けん。

【譯讀】

ここに記すのは正月の第二週甲申の日のことである。その日、王は葦京の宗教施設である辟雍の中の涇宮にあった。天の御子たるお方

(王)は、白姜に冫室して貝百朋を賜與された。《紀事》

(わたくし伯姜は天の御子たるお方の賜物に應えて祭器を作ること誓った)《誓詞》

伯姜は天の御子たるお方の賜物に應えて祭器を作ったのである。こ

の祭器を用いて祖祭を行ない、わが祖先の召伯日庚を偲ぶこととする。天の御子たるお方の萬年ならんことを祈る。世々孫子にいたるまで、天の御子たるお方の大いなる福を受けるであろう。伯姜は天の御子たるお方の大いなる賜物(加護)を日々受けるであろう。《祈念》

【評釋】

伯姜は邵伯日庚を祭るとしていることから、殷系氏族であることが分かる。「天子」は周王を指す。「王」という語と「天子」という語とが混在する銘文であるが、「王」という語が用いられるのはその所在を示す時だけで、後の祭祀の場における呼稱としてはもっぱら「天子」を用いている。念のため列挙しておこう。

- 1、天子が貝百朋を賜與する時。
- 2、白姜が天子の賜物に應えて祭器を作り、その祭器を用いて邵伯日庚の祭祀を行なうと述べる時。
- 3、天子の永續なることを祈念し、それによって世々孫子まで天子の大いなる福を受けることができる時。
- 4、作器者・伯姜が日々天子の大いなる賜物を受けるであろうことを述べる時。

このように儀禮の場での王の呼稱は全て「天子」で統一されているということである。「天子」が王を示す同義の稱號として無規定に言い換えられているのではなく、祭祀の場に限って用いられる祭祀用語であることが分かる。ここに王と天子との使い分けがある。儀禮の場においては王は「天子」すなわち超越神「天」の御子として認識され

ているということである。「天子萬年」は天の御子たるお方の世が永遠に続くようお祈り申し上げるといふ意味であるが、そのことよって子孫もまたその福を受けるに違いないと述べている。そして作器者・伯姜自身もこれから後の日々、天の御子たるお方の大いなる恩寵を受けるであろうとして結んでいる。

㊦ 佳正月甲申、燹各、王休易厥臣父燹鬲、王勳貝百朋、

對揚天子休、用乍寶隣彝 《燹鬲》集成4121

【訓讀】

これ正月甲申。燹格る。王、厥の臣父燹に鬲を休賜す。王、貝百朋を勳す。

天子の休に對揚して、用て寶隣彝を作る。

【譯讀】

ここに記すのは正月の甲申の日のことであった。その日燹は、王から表彰を受ける場に赴いた。王は臣下の燹に鬲を賜與された。また王は、貝百朋を賞與された。《紀事》

（燹は王の賜物に應えて祭器を作ることを誓った。）《誓詞》

燹は天の御子たるお方の賜物に應えて祭器を作ったのである。《祈念》

【評釋】

作器者・燹は殷系氏族であるが、C《燹乍周公鬲》の銘文に周公の祭器を作ると記していることから見て、周公一族とは婚姻など何らかの親縁関係があったものと思われる。「王」という語と「天子」という語はこの銘文でも混在するが、この場合の「天子」も先ほどと同じ

ように儀禮の場での呼稱で、天子の賜物に應えて祭器を作るという、作器の由来を述べる箇所だけ「天子」という語を用いている。「天子」は周王を意味する同義の稱號として無規定に言い換えられるのではなく、祖祭において一族のものが朗唱する時の祭祀用語として用いられているのである。このようにして「天」を超越神とする宗教的秩序の下にあることを宣誓することになるのである。銘文に記されているのはこれだけの簡略なものであるが、西周前期の銘文はまだ定型化する前のスタイルを示している。祖祭における祭祀言語は中期以降に定型的な形を整えるようになり、「子々孫々」や「萬年」「寶用」などといった常套的な言葉が附されるようになるのである。

㊧ 佳三月、王令燹眾内史曰、壽井侯服、易臣三品、州人・重人・亶人、

拜頤首、

魯天子宥厥順福、克奔走上下帝、無冬令于又周、追考對不敢豕、邵朕福盟、朕臣天子、用册上王令、乍周公彝 《燹作周公鬲》集成4241

【訓讀】

これ三月、王、燹と内史とに令して曰く、邢侯の服を壽げよと。臣三品を賜ふ。州人・重人・亶人なり。拜して稽首す。

魯なる天子、厥の順福を招きたまひ、克く上下帝に奔走して、令を有周に終ふること無く、追孝して對へて敢へて墜さず、朕が福盟を邵く。朕、天子に臣ふ。用て王令を册上して、周公の彝を作る。

【譯讀】

ここに記すのはあの三月のことである。王は、燹と内史とに邢侯

殷の任務を助けるように命じられた。そしてそれに必要な臣下三人を與えられた。すなわち州人・重人・邠人である。私・爰は儀禮の作法に従い、額ずいて拜受した。《紀事》

偉大なる天の御子たるお方（邢侯）は、天の御意にかなって福を招きたもうた。また殷の超越神たる帝との間をも通交することができた。かくなるうえは、わが爰の家の命運が周室において盡きることなきよう、これからも周室の榮えあることを祈り、王命をないがしろにすることなきように祈って、今後とも爰の家の廟祭を續けることを明言するものである。朕は天の御子たるお方（邢侯）に仕えるものである。もって王命を記して、先公たる周公の祭器を作るのである。《誓詞》《祈念》

【評釋】

この青銅器の作器者も殷系氏族の爰である。最後に「周公の彝を作る。」とされていることから、周公一族とも婚姻などの何らかの親縁關係があつたものと考えられる。内史は言うまでもなく殷系氏族である。また邢侯は周公の後裔に當たる人物である。ここでは爰と内史の二人が主君に當たる邢侯の任務を補佐するよう王命を受けたことを記しているのであるが、その任務に必要な州人・重人・邠人の三人も賜與されている。

ここで注目すべき點は、この銘文に見える「天子」は周王を指すのではなく、爰の主君である邢侯を指しているということである。「天子」という語の捉え方は繰り返し述べてきたように、超越神「天」の宗教的秩序を前提とする言葉、すなわち「天の御子たるお方」という認識を示す言葉と考えるべきであろう。爰は殷系氏族であるが、爰からす

れば、邢侯も周王と同じように天の福を招くことのできる「天子」なのである。また天子たる邢侯は、殷の滅亡後も周王朝において祭られている殷の超越神「帝」との間をも通交することのできる聖職者であるが、その邢侯が携る祭祀儀禮において邢侯を助けるようにとの王命が爰に下つたものと思われる。殷系氏族である爰と内史とが邢侯の助祭を命じられているのは、殷の超越神であり殷代末期からは西周王朝でも祭られるようになった「帝」を祭る儀禮を含んでいるからではあるまいか。その意味では西周時代初期の《天亡殷》の銘文において天亡（人名）が王を助けて殷の祭祀を行なう、「天亡又王、衣祀圻王」（天亡王を佑け、王に衣祀す。）の場面を連想させるものがある。殷系氏族の爰もまた、このような形で西周王朝の中に深く入っていくものと思われる。興味深いのは周公の後裔である邢侯が「天子」であるかのように見做されている點である。

□ 佳九月既望庚寅、檜伯于遘王、休亡尤、朕辟天子檜伯、令厥臣獻金車、

對朕辟休、乍朕皇考光父乙、十卮不諱、獻身才畢公家、受天子休
《獻殷》集成4205

【訓讀】

これ九月既望庚寅、檜伯于きて王に遘ふ。休せられて尤亡し。朕が辟なる天子檜伯、厥の臣獻に金車を令ふ。
朕が辟の休に對へて、朕が皇考光ける父乙を作る。十世まで忘れず。獻、身、畢公の家に在りて、天子の休を受く。

【譯讀】

ここに記すのは九月の第三週庚寅の日のことである。その日、橧伯は王宮にて祭儀に奉仕した。それからほどなく王は、祭儀に奉仕した橧伯を讃える式をつつがなく終えられた。王宮での祭儀に奉仕して天の御子の列に連ねられたわが君なる橧伯は、その祭儀にともに奉仕した臣下の私・獻に金車を賜與された。《紀事》

我が君から頂いた賜物に應えてわが光輝ある亡父乙の祭器を作ることを誓った。《誓詞》

この祭器は、わが君の賜物に應えて、わが光輝ある亡父乙を記念するために作ったものである。わが一族はこのことを十世の後までも忘れない。獻自身の身は今後は畢公殿の家において、天の御子たるお方の賜物（加護）を受けるのである。《祈念》

【評釋】

Aの伯姜、B・Cの爰も殷系氏族であったが、ここに見える獻も殷系氏族である。またここでも獻から「天子」と呼ばれているのは周王ではなく、獻の主君である「橧伯」と讀めるのである。ただ、《爰乍周公毘》の場合とは少し事情が異なるようなので少々考證を加えておきたい。「橧伯」は王宮での祭儀を終えた後、周王からその功績を讃えられた。そしてその後、一族のもとに歸った橧伯は臣下の獻に金車を與えた。これは直接には橧伯からの賜物であるが、もともと王宮での祭儀に主君の橧伯とともに奉仕した功績に對する褒賞である。天子という語は直接には橧伯を指しているような語法になっているが、その背後には天子たる周王の影があるのである。つまり獻に金車

を直接賜與しているのは橧伯ではあるが、それを天子からの賜物と見なす認識が見てとれるのである。現代語の語法を基準にするならこうした飛躍はありえないだろうが、祭祀の場を想定するところこうした理解の仕方に落ち着く。獻自身はその後畢公の家に移り、天の御子たるお方の賜物つまり加護を受けると結んでいる。

最後の「獻身才畢公家。受天子休。」の「天子」が周王を指すのかそれとも橧伯を指すのか、語法だけから見ればこれも見極めにくいので議論の生じるところである。この場合の「休」が具體的な賜與物ではなく、見えない形で末永く繼續される周王の加護を示すものと思われるので、「橧伯」と取るよりも「周王」と取る方が適切ではないかと思われる。そのように理解することによって、橧伯の臣である獻が、超越神「天」の宗教的秩序に入る様を見ることができるのである。

以上見てきたことから分かるように、「天子」なる語は王を指す稱號のようなものではなく、天の思想による宗教的秩序を示す理念的な語で、祭祀の場において發せられる特別な語であったと思われる。なおこの銘文の考證の中で白川靜は「天子はもと東方系の語であったようである。」としているが、この點については次節で改めて取り上げることにする。

㊦ 王令辟井侯、出初、侯于井、霽若二月、侯見于宗周、亡述、迨王客葺京彫祀、雫若翌日、才辟籬、王乘于舟、爲大豐、王射、大龔禽、侯乘于赤旂舟、從死威、

之日、王曰侯内于霽、侯易玄周戈、霽王才敗、巳夕、侯易者規臣

二百家、齋用王乗車馬・金□・冂衣・市・鳥、唯歸、暹天子休告、亡尤、用翼、義寧侯顯考于井、侯乍册麥、易金子辟侯、

麥揚用乍寶障彝、用囑侯逆通、暹明令、唯天子休于麥辟侯之年、盟孫孫子子、其永亡冬、冬用宥德、妥多友、享旌走令 《麥方尊》集成 6015

【訓讀】

王、辟たる邢侯に令し、初を出でて、邢に侯たらしむ。霽若に二月。侯、宗周に見ゆるに尤亡し。王の葦京に格りて醜祀したまへるに塗ふ。霽若に翌日、辟雍に在り。王、舟に乗りて、大豊を爲したまう。王射て、大いに翼禽す。侯、赤旌舟に乗り。従ひて死ぬること、威る。之の日。王、侯を以て寝に入る。侯、玄彫戈を賜はる。霽に王、敢に在りて、巳夕す。侯、諸覘臣二百家を賜はる。齋に王の乗車馬・金□・冂衣・市・鳥を用てす。唯歸りて、天子の休に暹へて告したるに、尤亡し。用て翼みて、侯の邢に顯孝するを義寧せん。侯の作册麥、金を辟侯より賜ふ。

麥、揚へて用て寶障彝を作る。用て侯の逆造に囑し、明令に暹へん。唯天子、麥の辟侯に休せらるるの年なり。孫孫子子に盟ぶまで、其れ永く終ること亡く、終に用て徳を造し、多友を綏んじ。享く令に奔走せん。

【譯讀】

王は、わが主君たる邢侯殿に命じて、これまで治めていた初の地を出て邢の地の侯となることを命じた。二月のことである。邢の地に封ぜられた後、邢侯殿は宗周に赴き王につつがなくお目通りを得た。そ

の後、王が葦京に赴いて儀禮を行なうのにも邢侯殿は奉仕した。翌日のことである。葦京の中の儀禮施設である辟雍において、王は舟に乗り大禮を行なった。王は弓で禽を射て神に供えた。わが主君邢侯殿は赤い旗を立てた舟に乗り、弓で禽を射て王と同じように神に供えた。かくて大禮の祭儀を終えた。

この日、王は邢侯殿と伴に寝殿の儀禮を行なった。その後、邢侯殿は王から玄彫戈（彫り物を施した黒い玉の戈）を賜わった。

王はその夜また敢で夕禮を行なった。邢侯殿はこの夕禮の祭祀においても奉仕し、その功績の褒賞として武臣たち二百家を王から賜わった。さらに賜わったものは王の乗車馬・金の□・冂衣・市（膝掛）・鳥である。

ここに記すのは、わが主君邢侯殿が邢の地に歸り、天の御子たるお方からの賜物を供え奉り祖神に報告しお咎めを受けなかった次第である。そこで邢侯殿の亡父たる周公殿の靈を邢の地に迎え安置する儀式を行ない、私麥もその儀式にご奉仕したのである。邢侯殿の作册たる私・麥は、褒賞として主君邢侯殿から金を賜わった。

麥は主君からの賜物に應えてその金を用いて祭器を作った。これで邢侯殿がお出ましになる時の裸禮を行なうのである。また邢侯殿の命令にも應えるのである。

ここに記すのは、天の御子たるお方が、麥の主君たる邢侯殿を表彰された年のことである。孫々子々に及ぶまで、永遠に榮えることを祈る。つきることなき徳を與えられ、多くの友を安んじるように、天の御子たるお方の命を享受して祭事にいそしむこととする。

【評釋】

麥は作冊麥ともいい殷系氏族である。麥の主君邢侯は《爰作周公殷》でも見たように周公の後裔である。さきほど見た《爰殷》と同じように殷系氏族が周公の後裔の臣下になっている例である。語法的には主君邢侯を「天子」と呼ぶ例に見えるのであるが、微細に見ると微妙な要素を残しているので注意深く読み取る必要がある。読み取りにくいのは、ここまで見た銘文と違ってかなり複雑な構成になっていることによる。つまり、表彰を受ける儀禮が複数にわたること、表彰を受ける人物が複合化していることなどが絡み合っていて、「天子」なる語が指している對象が特定しにくい原因になっている。理解の便のために整理してみることにする。

- 1、王が麥の主君を邢侯に任命した。
- 2、二月、邢侯は王に宗周で見事した。
- 3、王が葦京に出御して醜^ウ祀^シする際に邢侯が奉仕した。
- 4、その翌日、王は葦京の辟雍にて舟に乗り大禮なる祭祀を行なった。大禮の様子は以下のごとくである。
 - ①王が弓で禽を射て神に供えた。
 - ②邢侯は赤旂舟に乗り弓で禽を射て王と同じように神に供えた。
- 5、大禮の祭祀の後、王と邢侯とは寢殿に入り祭儀を行なった。その時邢侯は王から玄彫戈を賜與された。
- 6、王はまたその夜、啟で夕禮を行なった。この夕禮でも邢侯は奉仕した。

7、邢侯が夕禮に奉仕した褒賞として武臣二百家という莫大な賜物を授けられた。

【ここまでが、麥の主君である邢侯が王の祭儀に奉仕し、その褒賞として莫大な賜物を受けた経緯を述べた部分】

8、わが主君邢侯は邢の地に歸り、天子から賜わった莫大な賜物を祖神に供えて報告したところ、お咎めを受けなかった。

9、次に邢侯の亡父周公の靈を邢の地にお迎えし安置する儀禮を行ない、麥はその儀禮に奉仕した。

10、邢侯の作冊たる麥は、主君邢侯からその褒賞として金を賜わった。

【麥が主君邢侯から受けたという《紀事》（その時、麥はその金で祖祭を行なうための祭器を作ること誓った。）《誓詞》】

11、以下は、《祈念》として述べる部分であるが、やや複雑になっている。この祭器を作った経緯が麥自身にとって記念すべき内容だったことは言うまでもないが、そもそもそれが、麥の主君邢侯にとって記念すべき出来事だったのであり、その出来事に麥自身が関わられたことを記念するために作ったものだと記しているのである。

以上のように整理すると、最後の「天子」という語は麥の主君邢侯を想定しながらも、邢侯に賜物を授けた「天子」たる周王をも背後に意識する用語であることが領けるであろう。西周前期における「天子」の指す對象が單に周王だけとは限らず特定しにくい理由はここにあり。《爰作周公殷》で邢侯を「天子」と見なしていた例もこれと相似

様相を示していたことを想起していただきたい。このように、その示す対象が曖昧とも言える様相を呈していた「天子」なる語が、中期以降には全て周王を指すようになる。そこに天の思想が浸透していった跡を見ることができるのである。

(四) 白川静の提示する「天子」について

「天子」なる語が主に祭祀の場で用いられる祭祀用語であり、西周王朝のバックボーンである超越神「天」の存在を意識してはじめて生じる特別な語であることがお分かりいただけたことと思う。本稿ではそれを「天の御子たるお方」と譯しておいた。ただ恩師白川静は《獻殷》の考證の中で「天子はもと東方系の語であったようである」という、氣になる暫定案を示していたので、この件に關する私の考えを記しておきたい。先ず該當箇所を引用する。

天子と王とは後世同義語とされているが、古くは兩者の間に區別があつたらしく、「朕辟 天子」とは「朕辟」というのと同じ。「朕辟」は王に限らず、その主君を稱する語であつた。それで主従の關係を以ていうときには、爰殷「朕臣天子」・頌鼎「峻臣天子」のように天子と臣とを對稱している。爰殷・麥尊では天子・王・辟がそれぞれの語義において使い分けられていて、その關係をみるることができる。また銘文中の記事には王といい、對揚の語には天子と稱する例が多いが、そこにも用語上の區別がみられる。天子はもと東方系の語であつたようである。象父・象子卣は殷の滅

亡後においても天子卣と稱している。天子の語を用いている周初の金文例をみると、東方系の器にその例が甚だ多い。帝の嫡子・大子の意から出た語で、多くは自己の辟君に對する尊稱として用いている。また象伯彘殷にはその文考を釐王と稱しているが、その家系・出自によっては、祖考に王の語を用いる慣用もあつたものと思われる。

「朕辟天子」とは鹽園器に「皇辟君」というのと語例同じ。上文に單に檮伯というのは王の助祭のときのことであり、ここに「朕辟天子檮伯」というのは獻の主君としての稱である。下文の對揚の語においては單に「朕辟」と稱している。²⁾

白川の暫定案に關する私の考えは隨所に示してきたが、本節の結びとして改めて整理しておくことにする。

一、西周前期の銘文で「天子」という語を用いているのは東方系氏族(殷系氏族)に限られていたため、このような案が提示されていたのだが、これはあくまでそのような現象を指摘するに留まっております、それ以上踏み込んで考察するにはいたらなかった。

二、「象父・象子卣は殷の滅亡後においても天子卣と稱している。」と述べているが、これは現在《王子聖觥》集成九二八二と呼ばれている青銅器の文字の一部が缺損しているため、誤って「天子卣」と讀まれていたことによるもので、「王子卣」と讀むべきところであつた。おそらくこのことと上記の現象とが相俟って「東方系の語」という

考えが出てきたものと思われる。

三、以上のことから「天子」が殷代の甲骨文や金文には用いられなかった語であることが明らかになった以上、東方系の語と見做す根拠がなくなるのである。

四、西周前期の銘文の具体的な用法から見て、「天子」は祭祀の場で使われる特別な語であって、必ずしも「王」と同等に扱える語ではない。この二つの語の性格の違いを認識していなかったものと思われる。

五、天子（王）の賜物を示す語は前期の「天子休」、中期の「天子丕顯休」、後期「天子丕顯魯休」というように次第に莊嚴化の度合いが高まっていくが、「王休」にはそのような例が見られず、後期にいたって「王休」という表現そのものがほとんど見えなくなる。これも「天子」が祭祀の場における特別な言葉であることを物語るものである。この件については後述する。

六、「天子」は天の思想による宗教的秩序を支える超越神「天」を前提にしてはじめて生じる語である。本稿ではこれを「天の御子たるお方」と譯しておいた。

二 天の思想が浸透する現象

(一)「對揚王休」類から「對揚天子休」類へ

表一に整理したのは、金文の《祈念》部分に見える文言のうち、王の賜物に應えて祭器を作り、その祭器で氏族の祖祭を行なうのだという旨を述べる部分の、時期別の用例数を数えたものである。これによっ

て表現の仕方の變遷を見て取ることができる。この部分はその氏族と西周王朝の関係を祖祭の場で確認する意味をもつのであるが、その文言が時代とともに「對揚王休」から「對揚天子休」へと變化していく様をはっきり示している。

前期には周王を王と呼び、「王の賜物に應えて祭器を作る」と述べているものが八割を占めていたのが、中期になると「王の賜物」という場合と「天子の賜物」という場合とがほぼ同数になる。そして後期には「王の賜物」という表現自體がほとんど見えなくなり、もっぱら「天子の賜物」に統一されるようになる。氏族に與えられる王からの賜物が全て天子の賜物だと認識されるようになるのである。天子の賜物といっても、直接には周王から與えられる賜物であるが、周王は超越神「天」から天下を治めるよう命ぜられた、つまり「天命を膺受した」天子である。その天子から儀禮を通じて與えられた賜物は超越神「天」の賜物という意味をもつ。こうした認識が西周王朝に従う氏族の中に浸透していく様を見てとることができる。これを「天の思想」による宗教的秩序の確立と呼ぶことができる。

なお説明の便宜上「休」を「賜物」とだけ表現したが、前稿の「西周前期における王姜の役割——殷周革命論ノート(二)」で検討したように、「休」という語は單なる品物としての賜物だけを指すのではなく、それを與える儀禮そのものをも含む意味合いがあった。祖祭の場で「休」を朗唱する者たちの脳裡に、表彰式の場が描き出されていく機能をもっていた可能性があるのである。

表一 「對揚王休」類と「對揚天子休」類の用例数の變遷

| | 「對揚王休」類 | 「對揚天子休」類 |
|----|---------|----------|
| 前期 | 18 + 2 | 5 |
| 中期 | 45 | 47 |
| 後期 | 0 + 2 | 39 |

以上の表の読み取りができれば、ほぼ説明の要件を満足するのであるが、念のためにそれぞれの時期の該當部分を見ておくことにしたい。

青銅器の斷代は『殷周金文集成』や白川靜・林巳奈夫のものなど諸氏の斷代を参考にして筆者が判斷したものである。参考のために最後にまとめて掲げておいた。³⁾ただこの斷代を絶対視するのではなく、あくまで相対的なもの暫定的なものと考えていたいただきたい。したがってここに示した統計の数字も相対的な意味しかもたないが、長いスパンで見た時にはこの概数の變遷に意味を見出しでもいいのではないかと考える。

1 【前期】

【對揚王休】類 18 + 2例……+2は「對揚王休令」型1例、「對揚王休翼」

型1例である。

①佳九月初吉戊辰、王才大宮、王姜易不壽裘、對揚王休、用乍寶

《不壽殷》集成4060

(これ九月初吉戊辰。王は大宮に在り。王姜、不壽に裘を賜ふ。王の休に對揚して、用て寶を作る。)

【對揚天子休】類 5例

②佳正月甲申、爰各、王休易厥臣父爰髡、王勳貝百朋、對揚天子休、用乍寶隣彝 《爰殷》前出

(これ正月甲申。爰格る。王、厥の臣父爰に髡を休賜す。王、貝百朋を勳す。天子の休に對揚して、用て寶隣彝を作る。)

2 【中期】

【對揚王休】類 45例……「對揚丕顯休」型の1例もここに入れた。

③佳三月初吉乙卯、王才周、各大室、咸井叔入右趨、王乎內史册令趨、更厥且考服、易趨哉衣・載市・同黃・旂、趨拜頤首、揚王休對、趨蔑曆、用乍寶隣彝、緹孫子、毋敢豕永寶、佳王二祀 《趨解》集成6516

(佳三月初吉乙卯、王、周に在り。大室に格る。咸井叔、入りて趨を祐く。王、內史を呼びて趨に册令せしむ。厥の祖考の服を更げと。趨に織衣・載市・同黃・旂を賜ふ。趨、拜して稽首し、王の休に揚へて對ふ。趨、蔑曆せられ、用て寶隣彝を作る。世孫子、敢て堅すことなく永く寶とせよ。佳王の二祀なり。)

【對揚天子休】類 47例

④佳七年十月既生霸、王在周般宮、且、王各大室、井白入右趙曹、立中廷北鄉、易趙曹載市・同黃・織、趙曹拜頤首、敢對揚天子休、用乍寶鼎、用鄉朋友 《七年趙曹鼎》2783

(佳七年十月既生霸、王、周般宮に在り。且に王、大室に格る。邢伯入りて趙曹を祐け、中廷に立ちて北嚮す。趙曹に載市・同黃・織を賜ふ。趙曹拜して稽首し、敢て天子の休に對揚して、用て寶鼎を作る。用て朋友を饗せ

ん。

3 【後期】

「對揚王休」類 0 + 2例……+ 2例と記したのは「對揚王休命」型をこ

こに入れたからである。

「對揚天子休」類 39例

⑤佳十又六年九月初吉庚寅、王才周康刺宮、王乎土習召克、王親令克、適涇東至于京自、易克甸車・馬乘、克不敢豕、專奠王令、克敢對揚天子休、用乍朕皇且考白寶鬪鐘、用甸屯段永令、克其萬年、子子孫孫永寶 《克鐘》 204

(佳十又六年九月初吉庚寅、王、周の康刺宮に在り。王、土習を呼び克を召さしむ。王、親から克に令し、涇東を適して京師に至らしむ。克に甸車・馬乘を賜ふ。克、敢て墜さず。溥く王令を奠めん。克、敢て天子の休に對揚して、用て朕が皇祖考伯の寶鬪鐘を作り、用て純嘏永令ならんことを匂む。克、其れ萬年ならんことを。子々孫々、永く寶とせよ。)

(二) 「對揚天子休」類の莊嚴化の過程

表二に整理したのは、表一で見た「對揚天子休」類の表現の仕方の變遷である。前期には「對揚天子休」(天子の休に對揚して)とだけ言っていたのが、中期になると「對揚天子不顯休」(天子の不顯なる休に對揚して)というように、「不顯」(大いに顯らかなる)という修飾語が加わり、天子の賜物が莊嚴化される現象が見られる。これが「對揚天子休」(天

子の休に對揚して)とだけいう表現を壓倒して過半数を占めるようになるのである。このような莊嚴化が「王休」の場合には見られないという事實から、王という語と天子という語との性格の違いがはっきり見て取ることができるとであろう。何度も繰り返しているが、「天子」という語は祭祀の場において用いられる特別な語なのである。

また中期には「對揚天子不顯休」に「魯」(大いなる)の語を加えてさらに莊嚴化した「對揚天子不顯魯休」(天子の不顯なる魯休に對揚して)という表現も少し見えはじめ、後期になるとこの表現が他を壓倒して過半数を占めるようになる。天子の賜物の莊嚴化が後期にいたって最高度に達するのである。この現象と、表一で見た「對揚王休」(王の休に對揚して)という表現が姿をほぼ消すという現象とを對比して見れば、祭祀の場において「天子」なる語がその莊嚴化とともに專一化される意味が自ずから理解できるであろう。

表二 「對揚天子休」類の莊嚴化

| | 前期 | 中期 | 後期 |
|-------------|----|----|----|
| 「對揚天子休」型 | 5 | 15 | 12 |
| 「對揚天子魯休」型 | 0 | 0 | 4 |
| 「對揚天子不顯休」型 | 0 | 25 | 6 |
| 「對揚天子不顯魯休」型 | 0 | 7 | 17 |

注 それぞれの型で部分的に異なる表現を採るものもあるが、左記のようにひとまとめにして数えた。

「對揚天子休」型に入れたもの……「對揚天子休命」「對揚天子休釐」「對揚天子厥休」「對揚天子之休」。
「對揚天子魯休」型に入れたもの……「對揚天子魯休令」「對揚天子魯命」「對揚天子顯令」。

「對揚天子不顯休」型に入れたもの……「對揚天子丕休休」

「對揚天子丕休休」型に入れたもの……「對揚天子丕休休」

「對揚天子丕休休」型に入れたもの……「對揚天子丕休休」

「對揚天子丕休休」型に入れたもの……「對揚天子丕休休」

「對揚天子休」類の變遷を概観しておいたので、詳細な説明は不要だと思われるが、以下、この類の各型別にそれぞれの時期の該當部分を見ておくことにしたい。

1 「對揚天子休」類の「對揚天子休」型

統計上この型に入れたものに「對揚天子休令」なる文言のものがあ
り、これが中期・後期と一例ずつ見えるのでバリエーションの例とし
て掲げておく。これも「對揚天子休」型としての莊嚴化と見られる。
ただ中期以降の銘文には長文が多いので、繁雑さを避けるために、該
當する文言の部分だけを掲載することにする。短文の場合はこの限り
ではない。

1 【前期】……5例

①佳正月甲申、爰各、王休易厥臣父爰高、王勳貝百朋、

對揚天子休、用乍寶隣彝 《爰高》集成4121前出。

(これ正月甲申。爰格る。王、厥の臣父爰に高を休易す。王、貝百朋を勳す。天子の休に對揚して、用て寶隣彝を作る。)

2 【中期】……15例

②趙曹拜頤首、敢對揚天子休、用乍寶鼎、用郷朋友

《七年趙曹鼎》2783 前出。

(趙曹拜して稽首し、敢て天子の休に對揚して、用て寶鼎を作る。用て朋友を饗せん。)

③詢頤首對揚天子休令。用乍文且乙白同姬隣殷。詢萬年。子子孫孫永寶用、〔下略〕《詢殷》4319

(詢、稽首して、天子の休令に對揚し、用て文祖乙白同姬の隣殷を作る。詢萬年ならんことを。子々孫々永く寶用せよ。)

④敢對揚天子休釐、用乍皇考武侯隣殷、用易豐壽永令、子子孫孫永寶 《雁侯見工殷》補378

(敢て天子の休釐に對揚して、用て皇考武侯の隣殷を作る。用て豐壽永令を賜はらんことを。子々孫々永く寶とせよ。)

3 【後期】……12例

⑤克敢對揚天子休、用乍朕皇且考白寶鬲鐘、用勺屯段永令、克其萬年、子子孫孫永寶 《克鐘》204

(克、敢て天子の休に對揚し、用て朕が皇祖考伯の寶鬲鐘を作る。用て純嘏永令ならんことを句む。克、其れ萬年ならんことを。子々孫々永く寶とせよ。)

⑥山敢對揚天子休令、用乍朕皇考弔碩父隣鼎。用廡勺覺壽綽縮水令需冬。子子孫孫永寶用 《善夫山鼎》2825

(山、敢て天子の休令に對揚し、用て朕が皇考叔碩父の隣鼎を作る。用て眉

青綽縮にして、永令靈終ならんことを祈句す。子々孫々永く寶用せよ。

II 「對揚天子休」類の「對揚天子魯休」型

統計上この型に入れたものに「對揚天子魯休令」、「對揚天子魯命」、「對揚天子顯令」なる文言のものがある。何れも後期の型である。これも参考に掲げる。

1 【前期】……なし

2 【中期】……なし

3 【後期】……4例

⑦旅對天子魯休揚、用乍朕皇考車弔大罇甝鐘、皇考嚴才上、異才下、
豐豐臺臺、降旅多福、旅其萬年、子子孫孫、永寶用言
《虢叔旅鐘》 238

(旅、天子の魯休に對へて揚へ、用て朕が皇考惠叔の大罇甝鐘を作る。皇考、嚴として上に在り。翼として下に在り。豐豐臺臺として、旅に多福を降さん。旅、其れ萬年ならんことを。子々孫々、永く寶として用て享せよ。)

⑧無異拜手頤首曰、敢對揚天子魯休令、無異用乍朕皇且釐季隣殷、無異其萬年、子孫永寶用、《無異殷》 4225

(無異、拜手稽首して曰く、敢て天子の魯休令に對揚せんと。無異、用て朕が皇祖釐季の隣殷を作る。無異、其れ萬年ならんことを。子孫永く寶用せよ。)

⑨廼拜頤首、對揚天子魯命、用乍寶殷、廼其萬年、子子孫孫、其永寶用 《何殷》 4202

(廼、拜して稽首し、天子の魯命に對揚して。用て寶殷を作る。廼、其れ萬年ならんことを。子々孫々、其れ永く寶用せよ。)

⑩頌其萬年無疆、日暹天子覲令、子子孫孫永寶用 《史頌鼎》 2787
(頌、其れ萬年無疆にして、日に天子の覲令に暹へん。子子孫孫永く寶用せよ。)

III 「對揚天子休」類の「對揚天子丕顯休」型

統計上この型に入れたものに中期の「對揚天子丕杯休」、「對揚皇天子丕杯休」、後期の「對揚天子丕顯休釐」なる文言のものがある。これも参考に掲げる。

1 【前期】……なし

2 【中期】……25例

⑪望拜頤首、對揚天子丕顯休、用乍朕皇且白囡父寶殷、其徇年、子子孫孫永寶用 《望殷》 4272

(望、拜して稽首し、天子の丕顯なる休に對揚して、用て朕が皇祖伯囡父の寶殷を作る。其れ萬年ならんことを。子々孫々、永く寶用せよ。)

⑫長由蔑曆、敢對揚天子丕杯休、用肇乍隣彝 《長由盃》 9455
(長由蔑曆せらる。敢て天子の丕杯なる休に對揚して、用て肇めて隣彝を作る。)

⑬善敢拜頌首、對揚皇天子丕休、用乍宗室寶隣、唯用易福、嘒前文人、秉德共屯、余其用各我宗子季百生、余用句屯魯季萬年、其永寶用之 《善鼎》 2820

(善、敢て拜して稽首し、皇天子の丕休なる休に對揚して、用て宗室の寶隣を作る。唯用て福を賜はらんことを。前文人を嘒ましめ、徳を兼ること恭純にせん。余、其れ用て我が宗子と百生とを格らしめん。余、用て純魯と萬年とを句めん。其れ永く寶として之を用ひよ。)

3 【後期】 ……6例

⑭大拜頌首、敢對揚天子丕顯休、用乍朕皇考刺白隣段、其子子孫孫、永寶用 《大段二》 4298

(大、拜して稽首し、敢て天子の丕顯なる休に對揚して、用て朕が皇考刺伯の隣段を作る。其れ子々孫々、永く寶用せよ。)

⑮駿方拜手頌首、敢〔對揚〕天子丕顯休釐、〔用〕乍隣鼎。其邁年。子孫永寶用 《噩侯鼎》 2810

(馭方、拜手頌首し、敢て天子の丕顯なる休釐に對揚して、用て隣鼎を作る。其れ萬年ならんことを。子孫永く寶用せよ。)

IV 「對揚天子休」類の「對揚天子丕顯魯休」型

統計上この型に入れたものに「對揚天子丕休魯休」(中期・後期)、「對揚天子丕顯皇休」(中期)、「對揚天子丕顯魯休命」(中期)なる文言のものがある。何れも中期の型である。

また後期には「對揚天子丕顯段休」なる文言のものが見える。やや

繁雜になるので後期の「對揚天子丕顯段休」だけを掲げる。

1 【前期】 ……なし

2 【中期】 ……7例

⑯望敢對揚天子丕顯魯休、用乍朕皇考寔公隣鼎、師望其萬年、子々孫々、永寶用 《師望鼎》 2812

(望、敢て天子の丕顯なる魯休に對揚して、用て朕が皇考寔公の隣鼎を作る。師望其れ萬年ならんことを。子々孫々、永く寶用せよ。)

3 【後期】 ……22例

⑰頌敢對揚天子丕顯魯休、用乍朕皇考龔叔・皇母龔始寶隣壺、用追孝、瀋句康彘屯右、通泉永令、頌其萬年眉壽、吮臣天子、雷冬、子子孫孫寶用 《頌壺》 9731

(頌、敢て天子の丕顯なる魯休に對揚して、用て朕が皇考龔叔・皇母龔始の寶隣壺を作る。用て追孝し、康彘純祐、通泉永令ならんことを祈す。頌其れ萬年眉壽にして、吮く天子に臣へ、靈終ならんことを。子、孫、寶用せよ。)

⑱寰拜頌首。敢對揚天子丕顯段休令、用乍朕皇考奠白奠姬寶般。寰其邁年。子々孫々、永寶用 《寰盤》 10172

(寰、拜して稽首し、敢て天子の丕顯なる段休令に對揚し、用て朕が皇考鄭伯・鄭姬の寶盤を作る。寰、其れ萬年ならんことを。子々孫々、永く寶用せよ。)

(三) 小結

祖祭という一族の紐帯を強める意味をもった祭祀の場で朗唱される青銅器の銘文。そこにはそれぞれの氏族と西周王朝との深い関係が確認される内容を看取することができる。そうして当初は祭祀の場でも王と呼んでいた周王のことをわざわざ「天子」と呼ぶようになっていくという現象。そこに西周王朝の超越神「天」を崇拜する思想が深く浸透していくさまを捉えることができるのではあるまいか。こうして、殷王朝滅亡後の宗教的秩序の混乱は一應の収束を得ることができたものと思われる。こうした意味での大きな晝期が西周中期から突如現われる冊令(命)形式金文に示されているのは贅言を要しまい。冊令(命)形式金文に記された内容は、官職任命式という一見政治的な意味をもった儀禮の場において、それが超越神「天」の賜物によるものであることを王と臣下との間で確認する意味をもつものである。これを政治的秩序とも宗教的秩序とも捉えることができるところに冊令(命)形式金文のもつ獨特の位相があるのである。

だが誤解のないように念を押しておきたいのは、このことは古代王朝が築く宗教的秩序の確立ということであって、西周王朝の政治的權力が周王に集中する中央集権體制の完成を意味するわけではないということである。實際、西周王朝の後期は中央集権體制と呼ぶにはほど遠く、西周王朝に従属しているように見える諸族がそれぞれの獨立性を高める時代であることは衆目の一致するところで、共通認識にもなっているであろう。「中央集権體制の確立」と「諸族の獨立性の高まり」という一見矛盾する現象は、従来の研究者が頭を悩ませてきた

問題であるが、これは冊令(命)形式金文と呼ばれる任官式關係の銘文に王朝の官僚制の確立を見、そこに王の政治的權力の集中を見ようとするところからくるものである。すでに述べたように、冊令(命)形式金文は祭祀の場における王を天子と呼ぶことによって、超越神「天」の賜物・加護を諸族が受け入れることを示したものと考えるべきであろう。このような宗教的秩序を、私はパックス・ローマーナ (Pax Romana) に借りてひそかに「パックス・ジョウアーナ (Pax Zhouana)」と呼んでいる。西周王朝の軍事力がこのような呼び名に價するほどものであったかどうかは別として、諸氏族を宗教的につまり思想的に統轄する役割を果たしていたことは事實と見てよいであろう。この宗教的秩序は周王の政治的權力の消長とは別に、春秋時代・戰國時代へと命脈を保ち續けるのである。ここに述べた周王朝の宗教的な政治秩序については、以前「春秋時代における『天命』と『大命』——『天令(命)』『大令(命)』の意義變遷が示すもの(二)」で述べたことがあるのでご参照いただければ幸いである。⁴⁾

【資料】表一・二に用いた青銅器の分期

数字は『殷周金文集成』番號を示す。同じ青銅器で複数収録されている場合は、最初の番號だけを記した。また同銘の青銅器も多いのでこれも一つに絞った。

【對揚王休】類

《前期》 旃鼎 2704、歸瓿方鼎 2725、庚嬴鼎 2748、小臣麥鼎 2775、令鼎 2803、不壽段 4060、章白馭段 4169、天亡段 4261、宜侯矢

殷4320、遣卣5402、靜卣5408、貉子卣5409、庚嬴卣5426、小子生尊6001、作册折尊6002、中卣6514、州子卣補470、叔矢方鼎補287、「對揚王休令」中方鼎2785、「對揚王休翼」盥鬯器10386、

《中期》 昊生殘鐘105、不栢方鼎2735、呂方鼎2754、寓鼎2756、刺鼎2776、爾季鼎2781、伯農鼎2816、師鬲鼎2830、燹殷4046、大殷4165、敵殷4166、君夫殷蓋4178、穆公殷蓋4191、肆殷4192、春殷4194、師毛父殷4196、卻咎殷4197、適殷4207、段殷4208、免殷4240、五年師旅殷4216、走殷4244、戡殷4255、趙殷4266、輔師殷4286、免簠4626、寓卣5381、同卣5398、免卣5418、農卣5424、盞方尊6013、趯解6516、義盃蓋9453、尙白壺蓋9702、史懋壺9714、十三年癸壺9723、吳方彝蓋9898、免盤10161、鮮盤10166、夷伯殷補375、敵殷蓋補376、鮮殷補377、達盃蓋補402、「對揚王不顯休」牧殷4343

《後期》 「對揚王休命」鬲殷4215、害殷4258

「對揚天子休」類

《前期》

「對揚天子休」型 伯姜鼎2791、爰殷4121、獻殷4205、爰乍周公殷4241、麥方尊6015

《中期》

「對揚天子休」型 七年趙曹鼎2783、十五年趙曹鼎2783、大矢始鼎

2792、兩殷4195、恆殷蓋4199、敫殷蓋4243、申殷蓋4267、癸盃4462、三年癸壺9726、永孟10322、史密殷補384、殷殷補382、「對揚天子休釐」 雁侯見工殷補378、「對揚天子厥休」同殷蓋4270、「對揚天子之休」 盞駒尊6011、

「對揚天子丕顯休」型 獻鐘92、師秦宮鼎2747、大鼎2807、師農鼎2817、衛殷4209、即殷4250、大師虛殷4251、廿七年衛殷4256、望殷4272、靜殷4273、豆閉殷4276、師餘殷蓋4277、諫殷4285、揚殷4294、師墳殷蓋4283、師西殷4288、泉伯或殷蓋4302、師虎殷4316、匡卣5423、師邊方彝9897、走馬休盤10170、啟鼎補289、「對揚天子不卨休」 師邊殷蓋4214、長由盃9455、「對揚皇天子不卨休」 善鼎2820、

「對揚天子丕顯魯休」型 師望鼎2812、留壺蓋9728、宰獸殷補385、師奎父鼎2813、虎殷蓋補386、辛白歸苑殷4321、「對揚天子丕顯皇休」 利鼎2804、

《後期》

「對揚天子休」型 鮮鐘143、克鐘204、南宮柳鼎2805、弭叔師棠殷4253、伊殷4284、鄆殷蓋4296、敵殷4323、師夔殷4324、番生殷蓋4326、師詢殷4342、「對揚天子休令」型 詢殷4319、善夫山鼎2825、

「對揚天子魯休」型 號叔旅鐘238、無異殷4225、何殷1202、史頌鼎2787

「對揚天子丕顯休」型 汭其鐘187、噩侯鼎2810、此鼎2821、楚殷4246、大殷蓋4298、師穎殷4312、

「對揚天子丕顯魯休」型 南宮乎鐘 181、無車鼎 2814、趨鼎 2815、
頌鼎 2827、元年師兌殷 4274、三年師兌殷 4318、蔡殷 4340、善
夫克盥 4465、師克盥 4467、盥盥 4469、晉侯蘇編鐘 補50、吳虎鼎
補296、迷編鐘 補96、四十二年迷鼎乙 補297、四十三年迷鼎辛 補
298、「對揚天子丕顯魯休命」型 元年師旃殷 4279、「對揚天子丕顯魯
休命」型 袁盤 10172、

註

(1) 拙稿「《天亡殷》私考——殷周革命論ノート(一)」(立命館白川靜記
念東洋文字文化研究所紀要 七號所收) 參照。《天亡殷》には「王祀𠄎天室。
降。天亡又王、衣祀𠄎王」(王天室に祀る。降る。天亡王を佑け、王に
衣祀す。)と記されている。「衣祀」は殷の祭祀の意味であるが、周の武王
が天室で天の祭儀を行った後、王の宮室で殷の祭祀を行ったと記されてい
る。

(2) 「白鶴美術館誌」第九輯 四九、獻殷の項、五〇九頁。

(3) 【資料】表一・二に用いた青銅器の分期

(4) 「學林」第四九號(中國藝文研究會 二〇〇九年)

(立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所客員研究員)

